a.n.: a ZINE by anarchist_neko

目次

「2023 年 2 月のわたしのアナキズム」宣言 4

0.「アナキズム」 4

1.暴力行為と抵抗 4

2.イデオロギー、「秩序」、暴力 5

3.イデオロギー、言説、日常的な言行 7

4.インターセクショナリティ、経験と知識、連帯 9

5.世界、「説明」、二元論 12

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか 14

「当たり前の理」なんかじゃない。 17

パンとバラとモモ 20

なぜおしっこはもれるのか 22

無題 25

アナキストとして投票することについて 26

ツイッター以外でなんか活動してんの？ 31

静かな革命 33

炎.....38

普遍的な定点としてのセックス.....40

できることをできる限り最大限に.....43

この記事は中立的な観点に基づく疑問が 提出されているか、議論中です。.....44

小学生でも解ること.....47

あかね空.....51

つれづれなるままにカムアウト.....52

アナキズム.....52

フェミニズム.....54

性別.....57

指向.....59

わたしの理解する「性別」.....64

結局言いたかったこと.....65

We are Here, We are Queer.....67

「2023 年 2 月のわたしのアナキズム」宣言

0.「アナキズム」

2023 年 2 月のわたしは、自分らしく生きたい。

本来、この権利と自由はすべての人に保障されているはずである。だから、すべての人が自分らしく生きられる共同体に属している社会をわたしは求めている。そして、無数のそういった共同体が平等に協力しあってなりたっている社会を、わたしは求めている。そういった社会をすべての人が求め続ける社会を求める運動を、わたしは「アナキズム」と呼んでいる。

1.暴力行為と抵抗

2023 年 2 月のわたしのアナキズムは、暴力行為を拒絶する。

本来、すべての人には自分らしく生きる権利と自由が保障されているはずである。暴力行為は、それを奪い、尊厳を傷つけるもの。だから、暴力行為はわたしのアナキズムに反する。

だからこそ、わたしやわたしの大切な人たちが暴力行為の被害に遭い続けているとき、わたしはわたしたちを守るため、あらゆる手段を厭わず徹底的に抵抗する。そのときに限り、必要最小限の暴力行為が認められる。ただし、「本当の敵」は個々の加害者ではなく、加害者をうんだり、うむことを防げなかったり、加害を正当化したりする思想や制度、構造自体であることも、決して忘れてはならない。

アナキストであるということは、すべての人が自分らしく生きられる社会を実現しようとすること。だから、暴力行為を、それを生み出す根源にまで徹底的に遡り、そのすべてを拒絶し続ける。そして、それにより自分らしく生きる権利を踏みにじられたときは、徹底的に抵抗する。同時に、なにが「暴力行為を生み出す根源」なのかを常に考え続け、聞き続ける。

2.イデオロギー、「秩序」、暴力

2023 年 2 月のわたしのアナキズムは、自分らしく生きる自由や尊厳をすべての人が奪われ続けている社会に生きていることを認め、これに抵抗する。

わたしたちは、暴力を正当化するイデオロギーに縛られている。それは、状況や環境によって、国家体制主義、資本主義、本質主義、sexism、racism、ableism、allocishetero-ism、生殖主義、家父長制、植民地主義、人間中心主義、あるいはまだわたしが意識できていない様々な暴力的な思想として、名前やすがたかたちを変えながら、社会に遍在している。これらはたしかに表面的には大きく異なるが、すべて一部の人を「普通」とし、「普通」以外への暴力を正当化するイデオロギーのさまざまな顔にすぎない。

暴力を正当化するイデオロギーは、互いに絡み合い維持し合う規範や制度、権力構造などからなる「秩序」として現実化し、それを通じて正当化された暴力行為として実践される。わたしたちは、「普通」でないとされる属性であることを理由に、日常的に排除され、支配され、搾取され、周縁化され、被害者であることを求められる。わたしたちは、「普通」であるとされる属性であることを理由に、日常的に排除し、支配し、搾取し、周縁化し、加害者であることを求められる。

わたしたちは、無数の絡み合う属性の総体である。その無数の絡み合う属性の一部は「普通」であるとされる。一部は「異常」であるとされる。一部は「普通」ではないながらにも一定に容認されている。これらを元に、わたしたちは、搾取と加害によって成り立つ「秩序」のなかに位置づけられて、加害と被害を繰り返しながら生活し続けている。

アナキストであるということは、自分自身もまた、この「秩序」に参加していることを自覚した上で、暴力行為を正当化するこの邪悪な「秩序」のすべてを破壊するために戦い続けるということ。そのために、この「秩序」の背景にある暴力のイデオロギーの存在をみとめ、これに立ち向かいつづけるということ。だから、アナキストは、反資本主義者であり、フェミニストであり、Queer であり、エコロジストであり、反 ableist であり、反 racist であり、そして革命的である。

3.イデオロギー、言説、日常的な言行

2023 年 2 月のわたしのアナキズムは、わたしたちの日常的な行為の重要さを理解している。

暴力を正当化するイデオロギーは、社会に、より正確には共同体の言説や言行、知識体系の中に、偏在している。それはわたしたちの言葉の使い方から日々の献立、布団の中に至るまで、あらゆるところに存在する。それはわたしたちのあらゆる日常的な行為を縛ると同時に、あらゆる日常的な行為によって、維持され再生産され再規定され続けている。

イデオロギーは偏在する。それは、大抵「中立的」だとか「普通」であるとされる言説にもっともよく表れる。そこに存在するイデオロギーを指摘すれば「偏っている」とされる。アナキズムに代表されるような、搾取と加害の「秩

序」の破壊を求める主張や運動に賛同すれば、「過激」で「危険」であると咎められる。「行きすぎ」で「異常」で「おかしい」とされる。たとえあらゆる暴力行為に反対していようと、「暴力的」な「反社会的勢力」であるとレッテルを貼られ、国家によって、資本家によって、あるいは労働者や「人権家」によってすら、侮蔑され、生活の手段を奪われ、医療へのアクセスを拒否され、他方で「病気」とされ、「犯罪者」とされ、謀略と拷問の末に殺される。そして、斬り落とされた首と面白おかしく誇張された噂話を通じて、「普通」を再生産することを求められる。わたしたちは、だから多くの場合、「中立的」で「普通」な言行のみしか繰り返すことしかできない。わたしたちらしく考え、喋り、身体を動かし、生きる自由は、ここにはない。

だが、同時に。わたしたちは「普通」に縛られながらも、比較的安全に選べるいくつかの選択肢を常に与えられて続けている。それは、「小さな」ことかもしれない。挨拶の言葉として何を選ぶかとか、食肉を避ける日を増やす程度のことかもしれない。しかしそれは確実に一人分だけ社会を変えるのだ。そして、すべて人による無数の「一人分」の選択が蓄積し、「普通」は徐々に変化し続けているのだ。わたしたちはそうやって日常的に社会の在り方を変容させ、次のわたしたちの行動を縛る仕組みをつくっているのだ。

アナキストであるということは、わたしたちが日々繰り返す無数の選択を常に意識し、可能な限り最も「自分らしい」＝「アナキストらしい」と信じられ

る選択を繰り返しながら生きるということ。一人分のもたらす変化が、わたしたちの生きる社会の複雑なシステムに反映され、あるいは、単に周囲の人がまねるという形で、ゆっくりと広がっていくことを理解すること。それを通じて、ともに暴力を正当化するイデオロギーを内側から徹底的に破壊し続けるということ。社会変革に政府はいらない。革命に火炎瓶は必ずしも必要ではない。あなたが信じることのために、今できることを、今できるかぎり、最大限に。それは明日からの戦いに備え、今は休憩することかもしれない。

4.インターセクショナリティ、経験と知識、連帯

2023 年 2 月のわたしのアナキズムは、あなたの物語はあなたにしか書けないことを理解している。

わたしたちは、無数の絡み合う属性の総体として存在する。その無数の絡み合う属性をもとに、加害と被害の「秩序」のなかに位置づけられて存在している。この「秩序」に縛られながら、わたしたちは次の瞬間にいられる場所とできることの選択肢を与えられる。そして、わたしたちは選択を繰り返しながら、様々なことを知り、経験し、考えつづけてる。

わたしの経験や知識を分解することはできない。わたしの経験は、常に、「わたし」としての経験や知識でしかない。世界を経験するわたしは、常に無数の属性の総体である。わたしの撫でた猫は、常に無数の属性の総体としての

「わたし」が撫でた猫である、それは、この邪悪な「秩序」の中で経験される「一撫で」である。わたしのもつ属性同士が絡み合うなかで、その瞬間いる社会のすべての人のすべての属性と緊張し合うなかで経験された「一撫で」である。ある一つや二つの属性のみとして猫を撫でることはできない。

あなたの経験や知識も、分解することはできない。常に、「あなた」としての経験や知識でしかない。だから、あなたとわたしが同じある属性を持つからといって、あなたがわたしと全く同じ「一撫で」を経験することはない。わたしがあなたの「一撫で」を代わりに語ることも、知ることもできない。わたしが知ることのできるのは、あなたの語る「一撫で」の、わたしなりの解釈でしかない。

わたしたちはそうやって「一撫で」ごとに世界を経験する。わたしが直接知りうるのは、あくまでわたしが撫で続けることを通じて知った「世界」でしかない。だから、世界をわたしのように知りうるのは、わたししかいない。あなたの世界を知りうるのは、あなたしかいない。わたしが知ることをできるのは、あなたの語る「世界」の、わたしなりの解釈でしかない。

そして、あなたの物語とわたしの物語は、緊張し合い、絡み合い、引用し合っている。あなたの物語なくしてわたしの物語は存在しないし、わたしの物語なくしてあなたの物語も存在しない。そうやってわたしたちも、わたしたちの物語も、わたしたちの「世界」も、存在している。

だからこそ、アナーキーを求めなければならない。あなたの物語もわたしの物語も、誰にも代弁などできない。あなたの物語を聞くことでしかわたしはわたし以外の物語を知ることはできないが、わたしが解釈した瞬間に、それはわたしの物語の一部でしかなくなるのだから。

だからこそ、ともに語り続けなければならない。わたしたちは暴力行為を正当化するイデオロギーそのものに立ち向かっている。だから、ある属性であることが被害を正当化する理由になっているのならば、それを是正せねばならない。そのためには、その属性をもつすべての人の物語と、その属性をもたぬすべての人の物語が、語られ続けなければならない。そして、被害を受け続ける人々の物語が消されてきたことを意識しながら、すべての物語がまもられ続けられる革命行為を続けなければならない。

だからこそ、アナキストは、大文字のAnarchistやFeminist、Activistなどとされてきた人々以外のアナキストやフェミニスト、アクティビストも忘れてはならない。記録に残らなかった、物語をまもられなかった人たちの物語を、忘れてはならない。

アナキストであるということは、わたしたちにしか書けない物語を書き続けるということ。あなたの書いた物語を読み続けるということ。これまで忘れられてきた人たちの物語を、わたしたちなりにまもり続けるということ。語られなかった物語の存在を忘れぬと言うこと。そうやって、わたしにしか書けない

物語を書き続けるということ。そして、ともに、わたしたちの物語を語り続けるというということ。そして、もっとよく語り合うために、暴力も、「秩序」も、イデオロギーを再生産する言説も、すべて拒絶し続けるということ。

5.世界、「説明」、二元論

2023 年 2 月のわたしのアナキズムは、世界は複雑であることを理解している。

世界は、ぐちゃぐちゃとしている。わたしたちも、わたしたちらしさも、社会も、社会的交流も、自然も、すべて単純なかたちで描くことはできない。だが、ぐちゃぐちゃとした世界が自分を殺しにかかっているとき、繰り返される抑圧と搾取と暴力を理解できないのは怖い。だから、人々は自分の経験を抽象化し、単純でわかりやすく絶対的な図形の繰り返しで描こうとする。そうやって人々は「世界」を説明し、理解したつもりになる。二元論的な説明で曖昧なものを区別したつもりになり、本質主義的な説明で「定義」をしたつもりになる。絶対的な「敵」と絶対的な「味方」をつくり、虚偽の安寧を求める。いざその「定義」に反する経験があれば、「異常」な「例外」として無視し続ける。そうやって、世界を正確に映し出す鏡を作ったと満足しようとする。それこそが暴力を正当化するイデオロギーの再生産であることも気づかぬまま。

だが、世界はぐちゃぐちゃとしている。単純を求めるのは自然でなく、解釈をするわたしたちにすぎない。綺麗に張られた薄い氷の下は、本当は真っ暗な空洞でしかない。それにある時ふと気づいて、また嘘を重ねて逃げることになる。本当に対峙すべき「敵」を見誤り続け、「味方」側であるはずの自身の罪に気づけぬまま、「定義」することの暴力性を忘れ、一部以外を「例外」として排除するだけの理論を堅持し続ける。そして、永遠に前に進めぬまま、薄氷の上で踊り続ける。

アナキストであるということは、世界がぐちゃぐちゃとしていることを一旦認めるということ。すべての説明が一定の不十分性を持っていることを認め、それの更新を続けると同時に、常に目前のぐちゃぐちゃとした世界をどんな説明よりも優先するということ。そして、これまで「例外」とされてきた人たちの経験こそ、積極的に聴き続けるということ。

だから、アナキストであるということは、この宣言のすべても、この先書かれるだろうことのすべても、常に不十分であるし、一部を排除しているものであると理解するということ。だから、これは「2023 年 2 月のわたしのアナキズム」でしかないことを理解するということ。

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか

わたしは、「フェミニズム」は家父長制、より正確にはalloシスヘテロ家父長制を打破するための運動だと考えている。Alloシスヘテロ家父長制とは、簡単にまとめるならば、alloシスヘテロ男性を中心とし、それ以外のノンバイナリー、女性、およびこれら以外の性別の人たちが周縁化された「家族」を形成することが期待され、この「家族」を一種のプロトタイプにすると同時に、それを維持し、それによる生殖を通じたこれの再生産を望ましいものとしていく社会構造のことだと考えている。

わたしたちの「敵」はalloシスヘテロ男性ではない。社会に蔓延る家父長制だ。勿論「男性」に権力、影響力、発言権が与えられがちなのは問題だし、その結果、女性を中心として多くの人が抑圧され、殺されている。その暴力はこの（alloシスヘテロ）家父長制社会の結果であると同時に、これを維持する

＜力＞となっている。だが、すべての人はみなこの暴力的な構造に、被抑圧者かつ抑圧者として参加している。われわれはこの（allo シスヘテロ）家父長制社会に存在する以上、それに否応がなしに縛られ、そのフレームワークの中で生きることを強制されている（そうしないと殺される）。そして、時にはこれを打破するために強く強く行動しながらも、一定に、この価値観を再生産している（ここら辺の議論はわたしの「2023 年 2 月のわたしのアナキズム宣言」と通じることを考えているし、同様、フーコー的な「権力」の分析に多分に影響されている）。

ここで、この構造の中で周縁化されている集団 F を、とりあえず「女性」と呼び、フェミニズムの主体であると言うことも可能だと思う。そして、Haslanger のように、フェミニズムにおける有益 ameliorative な「女性」の在り方を模索することも可能かもしれない。だけれども、それで女性でない人、すでに周縁化されているノンバイナリーや一部の男性を含んだ集団に「女性」という名を与えることが、わたしは十分に ameliorative であるとも思えない。

だから、わたしはフェミニズムの「主体」は全ての人だと言う。フェミニズムは「みんなのもの」だと言う。そして、allo シスヘテロの男性も、AMAB のノンバイナリーも、もちろん AFAB の男性もノンバイナリーも、フェミニズムに女性と同じように参加できると言う。だから、フェミニズムという運動

において、男性がノンバイナリーや女性と等しく発言権を持つことは、なんの問題でもないと言う。そこにはいわゆるインセルやアンチフェミニストも含まれるだろう。だが、わたしは彼人らの思想を受け入れなければいけないとは一言も言ってないし、一つも思っていない。言っているのは、いわゆるインセルとされる人だってフェミニズムという運動において別に排除の対象ではないということだ。

それがもはや「フェミニズム」でないという意見も、一定に正しいのかもしれない。だけれども、大切なのは何が「フェミニズム」か、誰が「主体」かではなく、如何にしてこの家父長制を打破していくかではないのか。そのために「フェミニズム」を定義しなおしていくこと、そしてそのために「主体」を定義しなおしていくことこそ、ameliorative な試みであるとわたしは思う。

hooks, bell. (2000). *Feminism Is for Everybody: Passionate Politics.* South End Pr.

Haslanger, S. (2000). Gender and Race: (What) Are They? (What) Do We Want Them to Be? *Noûs, 34*(1), 31–55. https://doi.org/10.1111/0029-4624.00201

「当たり前の理」なんかじゃない。

とあるアクティビストのブログ記事が有料であることについて、茶々を入れた人がいたらしい。それに対して、「100円が払えなくて読めないのなら言及するのを諦めろ。アクセスできないのは、『ごく当たり前の理』だ。『無理筋の差別をねつ造』するな」といった旨の「反論」をしている方がいた。この「反論」は、どんな「文脈」や「発端」があったとしても許されない。

始めに断っておくと、「自分も生活があるから無料公開はできない」と言われたのなら、わたしは一切咎めなかっただろう。多くの人が、わたしも含めて、資本主義体制の中でそうやって生きている。本人や周りが不満だろうと、搾取性に気づいていようと、実際問題としてそれを避けて生活するのは難しい。だから無料でないことそれ自体を咎めるのは理不尽だと思うし、「無料にしろ」と迫るのはそれこそ「無理筋」だろう。「社会主義者／フェミニストな

ら、今すぐ自分の労働の成果をすべて無償化しろ」などとは誰も言わないし、主張していない。

だが、そういう社会であることは、決して「ごく当たり前の理」ではない。

今の社会において、「お金がない」、あるいは払えない理由は様々にある。性別や人種、身体の特性・特徴等によって、本来得られるべき賃金や支援を得られない人は多くいる。差別や抑圧、搾取等に苦しめられて就労できなかったり、不本意に休憩せざるを得ない人もいる。医療費等にお金を回す必要があり、自由に使える金銭が非常に制限されている人だっている。「たかが100円」でも、わたしにとっては一食分の金であるし、それだって常に余裕のあるものではない。こんな不条理で不平等な社会経済体制のなかで、金が払えなければ情報や娯楽へのアクセスを諦めねばならないのを「ごく当たり前の理」と言うのか。

お金がないのならアクセスできなくて「当然」である、すなわち、お金がある人だけがアクセスできてよいという価値基準は、少なくとも現状において、社会において周縁化されていない、いわゆる「マジョリティ」以外を一層排除するものでしかない。この体制から脱するのは現実問題としては困難ではあるものの、この価値基準を無批判に再生産することは、「買う」ために過酷な搾取さえ甘んじて受け入れ続けなければならない現状の正当化、そして深刻化にしか、つながらない。

人権に携わる人がその指摘を、たとえ不誠実な主張に対する反論として発せられたものであれ、「無理筋の差別をねつ造」などと言えることを、ましてや金がないなら「言及しなければいい」とまで言えることを、わたしは本気で許せない。それは投票に人頭税の支払いを求め、実質的に人種マイノリティの発言権を奪ってきたジム・クロウ時代の価値観といったいなにが違うのか。金のあることは、なにかへのアクセス権や発言権、あるいは社会運動へ参加する権利の根拠ではないし、無いことはこれらの権利を奪う理由にはならない。少なくとも、そうあるべきではない。

貧困者差別やレイシズム、エイブリズムなどといった思想は、ほかの軸でもマイノリティとして抑圧されている人を一層強く抑圧する。抑圧されれば自由に使える金はおろか、生活費すら一層減ってしまう。そのようななかで「金がないなら諦めろ、言及するな」と言うことは差別の助長以外のなにであるというのか。これらの抑圧構造を再生産し強化させながら謳う「女性の権利」は、自己矛盾以外のなにものでもない。そして、そのような主張の運動を展開する人たちは、わたしたちを抑圧する側の人間でしかない。少なくともわたしはそう思うし、こういった主張をする人たちを「フェミニスト」であるとも思えない。

パンとバラとモモ

こころも飢える、からだのように。パンをくれ。そしてバラをも。

―Oppenheim,James.（1911）.‘BreadandRoses.’（筆者訳）

Twitter のプロフに“Bread, Roses and Peaches for all!”と絵文字で書いてるのを、「どういう意味？」とたまに聞かれる。「パンとバラ」は女性参政権運動のスローガンに由来する。

> パンとは、すなわち家、屋根、そして安全。人生のバラとは、つまり音楽、教育、自然そして書物。彼女たち［女性］の票と、彼女らが声を持つ政府は、生まれ来るすべての子どもたちにパンとバラが与えられる国へと一歩近づけるだろう。「パンを皆に！そしてバラも！」が達成された日には、監獄も、絞首台も、工場で働く子どもたちも、路上でパンのために働

く女の子も、いないのだ。（Todd, Helen.（1910）.

“GettingOuttheVote”. TheAmericanMagazine. p.619. 筆者訳）

わたしはクィアなアナキストだから、サフラジェット運動にも色々問題があるという認識はあるのだけど（これはそのうち書くかもしれない）、「パンとバラを！」というスローガン自体の言っていることには賛成する。すべての人がパンとバラを手に入れられる社会を。

日々のパンを。すべての人へ健康でバランス良く、エシカルな食事を。医療を。安全で落ち着ける家を。安全を。日々のバラを。「バラのようなもの」ではなくて、バラを。議席ではなくて、バラを。すべての人へ教育を。芸術を。自由と尊厳を。幸せを。（これらは対立するものではないし、どちらかが欠ければもう一方も不足する。）

モモは、ぱん@feministpao ちゃんとの会話の中で挙がってきた。わたしの解釈がぱんちゃんの解釈と一致しているかはわからないけど、「ちょっぴりの贅沢」と理解してる。正確には、ちょっぴりの贅沢が出来る金銭的、物質的な余裕。たまにはおいしいモモを買う余裕を、すべての人へ。

だから、Bread, Roses and Peaches for all!パンとバラとモモの略取を。

なぜおしっこはもれるのか

「#おしっこもれる」というハッシュタグについて。元々は、「『トイレに行く』とか言う女は下品、せめて『お手洗い』と言え」みたいな話があったので、それへのカウンターとしてはじまった。そのうち、おしっこについて話すことの忌避感への対抗とか、誰でもしたいときに安全におしっこできるトイレをとか、いろんなものを込めたスローガンになった。

排泄は下品でもない、汚くもない。それは日常的な行動の一部であり、必要な行為の一つ。わたし自身外のトイレを使うのが苦手なのだが、トイレが近くて、外で映画観るの躊躇うレベルにも関わらず、お水飲むのを減らすみたいなことしてた。今の環境は少しマシになったのだけれども、そういう話題を忌避すべきもの、「汚い話」とすること、「ただの笑い話」で済まそうとすることは、問題だ。

IBSの話などもわたしのタイムラインなら普通に出てくることも多いけれども、やはり忌避すべきものとして現れることも少なくない。排泄以外もそう。汗も、生理も、成人のオムツ使用、ライナーやタンポン、あるいは例えば胸やペニス、クリトリスや膣を含む身体の話もそう。自慰やセックスの話もそう。体毛もそう。状況を問わず、笑いや性のネタにされることがある。タンポンの話をしたら、「興奮する」という旨のリプをもらったフォロワーもいる。そういうのを、問題だとわたしは言ってる。これらはただの普通の話のなのに。

下着を汚すこと、汚しそうになることは、常に「汚い話」じゃない。「笑い話」でもない。「ドキッとする話」でもない。それはただ、社会的な不平等の反映に過ぎない。

同時に、これは状況に応じて日常的な行為が「汚い話」や「笑い話」や「ドキッとする話」であることと矛盾しない。問題なのは、それがデフォルトであること。たしかに面白おかしく「#おしっこもれる」と書いてる時もあるし、書いてる人もいる。わたしもそう。だが、同時にこのハッシュタグ使ってる人の多くは、なんらかの理由により、安全にないしは安心して排泄することに困っている。それを小さな声で主張するハッシュタグがこれ。だから、次にこれを見た時、笑いながらでも構わないから、排泄やそれ以外に困る人たちのことを、どうか考えて欲しい。

んじゃ、エネドリ飲みすぎたので今日はこの辺で。

#おしっこもれる

無題

愛してほしいと思った夜は終わり、どうせ一人で死ぬと知る朝が始まる。それでもそれがさみしいのは、きっと夜を希(こいねが)う自分がいるからなのだろう。

世界が終わるとしても、終わるその日まで、毎日は続く。ただそれだけの事実が、陰鬱な朝焼けを一層明るくする。生乾きの下着についた匂いのように、隠せども、隠せども、私の身体を逃がさない。

アナキストとして投票することについて

投票は、暴力だ。

選挙は「民主主義」の幻想を維持しながら国家の権力を正当化する暴力装置だ。自公維に投票したことがないから、日本政府によって殺された人たちの死について罪を負わなくていい？　そんな甘ったれた考えは捨てろ。Allo シスヘテロ家父長制も、入管も、警察の暴力も、ホームレスネスを経験している人への弾圧も、タッマドーの支援も、資本主義体制も、わたしたちが政府に権力を与えることで実現し続けている。その結果、今日もまた誰かが傷つけられ、誰かが殺された。わたしたちの手は綺麗だなんて、思うな。

だけれども、投票しなければ、殺される。大好きな人たちが殺されていく。わたしが、殺される。投票すれば、もしかしたら、わたしたちを守れるかもしれない。わたしの大好きな人たちの負うはずだった致命傷は、重傷程度で治まるかもしれない。

自分の一票は、入管から天皇制にいたるまでのすべての暴力を確実に一票分だけ正当化する。これまでの、そしてこれからの暴虐に必要な権力をまた与えてしまう。今日（参議院議員通常選挙前日）までずっとずっと悩んで、なお自己防衛として一票投じた。その結論に至るまで、毎回、毎回、すごく悩む。そして、毎回、涙目で、自分たちを守るために誰かを傷つけることを選ぶ。

「消去法で選べばOK！」

「自公維以外の候補者の名前を書けばOK！」

「どんな宝くじよりコスパいい！」

投票は、暴力だ。それは、正当防衛のためかもしれない。確かに、わたしも投票した。これまでも投票してきた。それは、わたしが殺されるのを、自らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために、防ぐため。わたしの大好きな人たちが殺されるのを、彼人らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために、防ぐため。

その結果、わたしの投票の結果、一人分だけ、確実に国家の暴力が正当化された。その結果、今日も明日も自分が正当化した暴力の被害を受ける人たちがいる。傷つけられる多くの人がいる。殺される多くの人がいる。それを、わすれてはいけない。

これは「投票するな」「投票しろ」なんて単純な話ではない。「自民が〜」で終わる話でもない。今日までに国家が繰り返した暴力を、明日から繰り返す

暴力を忘れないで、ということ。そこに関与する意味を、絶対に無視しないで、ということ。

「在外投票間に合わない人のためにも投票を！」

「投票できない人のためにも投票を！」

わたしたちのあげる声は、声を奪われている人の代わりなどではない。あなたは、誰も代弁する権利はない。傲るな。

そして、選挙に参加することで、この不平等な制度を肯定し、正当化している。忘れるな。

こんな話をしていたら、自分が立候補すればいいじゃないかと言われた。わたしにも被選挙権があり、供託金出せて、その上で選挙活動を行うことが可能なばかりか、さまざまなマイノリティ属性にも関わらず与党の一員にすらなることができると思ってくれてるのはうれしいよ。だけど、そうなっても「少数の選民」にわたしが入っただけにしかすぎない。わたしが選ばれうること、それは様々な問題の、本質的な答えではない。わたしはわたし以外の経験を、思想を、語れない。同様に、あなたも、あなた以外の経験を、思想を、語れない。わたしが語れるのはわたしの経験のみであるし、あなたが語れるのは、あなた自身のそれらでしかない。

「投票するな」でも、「白紙投票しろ」でもない。実際、私は２枚ともに、私の思うlesserevilの氏名を、ともにわたしが差別的だと思う思想を持っていると知りつつ、暴力であることを承知で書いた。投票を呼びかけるなとも言っていない。事実、投票をしないのは、与党に「有利」であるのは、そして、その結果Queerな人がより多く殺されるのは百も承知だ。その行為の意味を真剣に真剣に考えてと、選挙制度の不平等性も国家制度の暴力も考えずに安易に語るのをやめてと、そして自身の暴力行為に責任をもてと、言っている。

「罪悪感」をおぼえてもどうしようもない。だけれども、ごく一部の人に権力を与え続ける限り、ましてや未だに一票の格差すら是正しない選挙の在り方の中でそれを続ける限り、根本的な解決は遠い。そして、投票をすることで、わたしたちはそれを正当化している。

社会的な力の差異を生む構造の存在する限り、その中で個々の「権力者」を攻撃しても変わらない。これは政治批判も、選挙も一緒だ。わたしの思う「アナキズム」は、この「社会的な力の差異を生む構造」のすべてを破壊することを共同体として志向する、という合意形成を求めることであるような気がする。「社会的な力の差異を生む構造」は、わたしたち自身の選択できる言説や行為を縛ってはいるけれど、同時に、わたしたちのこれらによって維持もされているのだということに気づくことが、まず「わたしの思う『アナキズム』」

のはじまりであると思う。そして、それ無しには、社会は変わらない。わたしたちは、自由になれない。

社会を変えるのは政府だけじゃない。わたしたち自身の自発的な行動や自由な連帯、抵抗を、その力を、それのもつ希望と恐ろしさを、絶対に忘れるな。それを、ごまかすな。

ツイッター以外でなんか活動してんの？

「ツイッター以外でなんか活動してんの？」とか「矢面に立たずに済む特権」とかいう人。「現場に来てみろ」とか言う人へ。

悪かったな、うつ病で。カムアウトできてなくて。

クィアであるということは、日々マイクロだったりマクロだったりするアグレッションに立ち向かい続けているということ。世界は「普通らしさ」のロジックに支配され、そうでない人々を抹殺、あるいは同化しようとしている。その中で、凛として抗い続けているということ。

クィアであるだけで、あなたは活動している。それが職場の会議室だろうと、学校の廊下だろうと、「家族」のいるコタツの中だろうと、布団の中であろうと、あなたは蜂起している。あなたは矢を全身に受けながら、なお、クィアとして、あなたとして生きている。

ツイッター以外でなんか活動してんの？

「現場」。まるで日常の中で受ける攻撃は尺たるものでないかのような言い草。差別はわかりやすい暴言や投石にしか無いような言い草。違う。差別とは我々を縛り、我々を嘲笑う「構造」の中に偏在するもの。それを破壊することこそが「ハンサベツ」であるはず。戦いの目的はなんなのか、それを忘れるな。

静かな革命

社会変革は火炎瓶やデモ、あるいは投票によってのみもたらされる訳ではない。オンラインだろうとオフラインだろうと、わたしたちは会話や消費、労働といった様々な日常行為を通じて、日々、少しづつだが確実に社会を変え続けている。漸次的な変化は蓄積し、わたしたちが次に取る行動、取りうる行動、そしてわたしたち自身すらをも、大きく変容させる。

わたしが買わなかった高野豆腐は、あるいはその代わりに買った挽肉は、明日の入荷数を決定する根拠の一つとなり、スーパーの在庫数を通して、わたしやわたしの周囲の人の献立を変える。わたしがコロナ禍の夕方に渋谷のスクランブルを渡れば、「スクランブルを渡る人」は一人増え、他者が同様の行動を取る際の心的障壁を一人分だけ減らす。社会問題に敏感であるという姿勢をとる人が差別的な表現を平然と口にすれば、差別的なステレオタイプを一言分だ

け確実に許す。わたしたちがもたらし続ける変化は蓄積し、やがて自分や自分の守りたい人たちを、特に社会的な弱者を、追い詰めていくことになる。

もたらされるのは、もちろん悪い結果ばかりではない。誤っていると信じる行動を避け、自らの信じるより良い代替案を行動を通じて示すことだって可能だ。わたしたちの様々な行為はやわらかな「プロパガンダ」となり、同様の行動を取るよう、取れるよう、世界を優しく変えていく。

わたしたちは、そうやって日常的な行動を通じて社会を変え続けている。そして、あらゆる人間のあらゆる行為の結果として生じたそれを見ながら、あるいはそれに縛られ続けながら、自身のあるべき姿や取るべき行動を問い直し、判断し、形成し直し続け、さらにそれをまた社会に反映させ返している。われわれの生活は、全員が嘘偽りのない声を出せ、消去法で代弁者を選ぶ必要などない「投票」として、永遠のフィードバック・ループを形成している。個人の行動以上に政府を通じた改革へ大きな期待を寄せているとしているとしても、少なくとも市民が変わらなければ政府は変わらない――「民主主義」社会であればなおさらに。

ならば、わたしは意識的に「正しく」あって、あるいはあろうとして、「一票」を投じ続けたい。少なくとも、自身の思想に反する意見を社会に反映させ

ることを避け続けたい。それは何よりも大切で本質的な政治運動であり革命行為であると、わたしは信じている。

わたしはそういった思いでずっと「自粛」を続けてきた。人を死に至らしめる可能性の無視できない行動を十分に避けられるのに選択するのは暴力でしかないと、そういった行動をとって良いと示すことはわたしにとって看過されるべきものではないと、そう思って生活してきた。「差別」という暴力と戦いながら、十分にできる対策を怠ったり、あえて積極的にリスクの高い行動をとるなどして他人を感染させるのは、わたしには自己矛盾にしか見えない。少なくともわたしは、わたしのできる範囲ですべきと思うことを可能な限りして、すべきでないと思うことを可能な限り徹底的に拒絶することで、政府の愚策に頼らずともできることがあることを、そうやって生きることができるということを、同じ考えの人たちと示し続けたいと思って行動してきた。

「宣言」が明け、都心の人の行き来は確実に増えた。夕方の山手線には酒の匂いが漂うようになり、自宅からコンビニまでの数分間ですれ違うマスクのない集団の数は倍増した。アクティビストを自称する人すらもが旅行し、密集して遊んでいる。

わたしはわたしの基準で、リスクが充分に下がったと確信できていない。確信できない以上、そして当分の間外出や外食を避けられる状況である以上、わ

たしはこれらを可能な限りで避け続けるしかない。政府の「宣言」解除はリスク評価に用いるデータの一つではあっても、自身の信じる正しさを無視する為の免罪符ではない。

これが過剰な反応なのか、正直なところ悩んでいる部分もある。そうである可能性は否定しない。ただ、懸念を持つに十分な理由があると判断し、そしてそれに基づく行為をもうしばらく続けられるのなら、わたしはわたしの思う正しい行為を繰り返す。そのことでその基準への不信感を表明し、感染拡大防止への協力を求め続ける。政府がどんな計画を持とうと、わたしたちはただわたしたちとして、わたしたちの信じる正しい行為をできる範囲で繰り返す。

もちろん、「できる範囲」は人によって当然変わる。わたしがこのような行動を取れることは、特有の環境や特権の結果でしかない。だから、お互いにお互いが可能な限りの情報を収集し、共有し、軌道修正を常に続けながら、日々自分の可能な限りで求める自分であれるように生き続け、そして、そうやって生きている隣人たちを見つめて考え続けるしかない。そうやって繰り返し選択する行動は他者から見れば「不十分」だとしても、わたしたちには「できる範囲」以上はできない。できる範囲で精一杯すべきと思うことをしているか、しすぎだとかなんて、本人にすら容易に判断できることではない。各々が、その時々でできる最も正しいことをし、過ちだと信じることを避けていくしかない。

だから、本当にそこまで考えた結果、あなた自身の思う「今取れる最も正しい行為」が、明日の夜にゴールデン街で会食すると決めることならば、それでいいと思う。わたしも、自分のすべきと思う行為をできる範囲で繰り返し続けることで、自分の思う正しさを訴え続けるだけ。各々のできる精一杯の「正しい」行為を繰り返していくこと、少なくともそうしようという意識の積み重ねこそが、そしてみなにそうやって生きることを提案し続けることこそが、静かな、しかし何よりも大切な革命行為だから。

炎

触れれば幸せになれる炎があるらしいと知ったのは中学生の頃で、わたしはそれ以降、なんとなくではあるが、それを求めて続けていた。事実その暖かさを頬に感じたこともあれば、その冷たさに震えている気がするときもあった。一度だけその炎を目にしたことがある。それは明るかった。あまりに明るすぎて、手を伸ばすのをためらった。わたしはそれに水をかけ、すべてを忘れたことにした。

今、それから遠く離れた今、あのとき手を伸ばさなかったことを後悔する。それともこれは後悔などではなく、高見の見物なのかもしれない。

あの炎を思う。無限に存在する世界のいくつに、焼けた手をあの人とつないで笑っていた自分がいるのだろうか。

普遍的な定点としてのセックス

「性別の基準は性染色体」言ってる人たちに対して、わたしは「あなたの考える『基準』は、性染色体に関する知識が一般に浸透する前後では変化してますよね」と思うけど、あの人たちからすれば、同じセックスという「真理」が基準で、それをより正確に表せるようになっただけ、となるのだろう。セックスは普遍的で固定的で、超越的な「真理」たる基準であるという考えで、技術や時代が進歩しても、ただその定点へ近づいていってるだけと解釈される。そして都合の悪い話は「例外」と処理し、独自の理由で受け入れるか、棄却しsexの普遍性を優先する。いくら矛盾を説明しても、いくらその理解が「生物学」的におかしいとか非論理的だとか社会の実態を反映してないとか言っても、こうやって最終的にはsexの普遍性の証拠として再解釈されていき、挙げ句にはこっちが「カルト」で「お気持ち」で「事実を無視」してて「非科学的」と拒否される。それでミスジェンし、一部の女性を「例外」にし、「女性

スペース」を「TRA 側陣営」や「TGism カルト」から守るだとか、ペニスのあるレズビアンやペニスのある女性を受け入れるレズビアンは「真のレズビアン」でないだとか言い始める。いくら実態に即してなくてもセックスは普遍的であると信じて疑えないから。

どうすりゃいいのかわからん。こういう考えのひとは放置して、コミュニティ内で頑張ってけばいい、って言いたいとこだけど、トランスやクィアの子の担任や友人、おやのひとやかぞくもいるだろうに。その人たちのせいで、深い傷を負ったり、ここにはもういなくなってしまった人たちも、いるだろうに。

セックスは普遍的な定点じゃないよ。元来よりジェンダーに影響されるものだし、社会の共有知識や技術によって身体の理解は変化し、医療の進展によって身体それ自体も予想できなかった変化をさせることができるようになった。

セックスも、なにがセックスかすらも、変化しつづけている。もとから定点じゃない以上、こっちが変更しようとしてるとされる「定義」など、少なくとも明文的には存在しないし、「定義」などし得ない。現状のごちゃっとした理解の不十分な「説明」はできる。でも、その説明も、それの語られる時代や社会に意味は依存する以上、決して普遍たり得ない。結局、やってるのはセックスを絶対的なものであるとすることて世界を単純化してるだけ。それは、ぐちゃぐちゃとし不安と抑圧と暴力にあふれた世界を説明するための、そこでつかの間の安全を得るための、戦略なのかもしれないけれど、問題をごまかしてい

るだけでしかないし、なんの解決でもない。全然「ラディカル」でもなんでもない。

できることをできる限り最大限に

結局わたしの言ってること、ずっと、「わたしたちの表現や行為、会話とかの蓄積に制限されたり影響されたりしながら、わたしたちはさまざまな認識や行為等を繰り返し、それが繰り返されて社会は更新されつづけてますよね。これを意識して日々生きるのが、何よりも大事ですよねー」ってだけな気もする。ALT をつけようも、女性の定義が日々わたしたちの言語使用によって更新されていることも、すべて。だから、「社会」に縛られ、影響されながらも、わたしたちがより自由かつ自律的に「社会」を変える＜力＞を持てる世界にするため、毎日、できることを、できるかぎり、最大限にするしかない。それこそが、（わたし独自の解釈も入ってるけど）「行為によるプロパガンダ」なんじゃないのかな、って思う。

この記事は中立的な観点に基づく疑問が提出されているか、議論中です。

「りんごがある。それをわたしが食べた。」

これは中立的だろうか。否。

「りんごがある。わたしによってそれは食べられた。」

これは？　否。

「りんごがある。わたしによってそれは囓られ、消化された。」

「わたしは」？　「ねこが」？　「リンゴを」？　「りんごを」？　「apple を」？　「Malus domestica を」？　「食べた」？　「囓った」？

わたしたちは、常にことばと視点を選択しながら、物事を語っている。りんごを食べたのかもしれない。りんごは食べられたのかもしれない。わたしが食

べたのかもしれない。わたしによって食べられたのかもしれない。「みかんを食べなかった」と書かなかった理由は？　いぬが食べたものを書かなかった理由は？

中立的。「中立的じゃない」「偏っている」「主観的だ」といったことばがありふれている。だが。本当に「中立」なことばをわたしたちは発することはできない。情報の提示は、常に主観的だ。

「本日ねこちゃんがりんごを食べました」など、NHK で報道されることはない。その際わたしの歯がぐらついた感じがしたことも、たぶんそれは気のせいだったことも、汁がお気に入りの服についたことも、わたしにとってはとても重要な経験だったにもかかわらず。わたしのものがたりは、わたしにとっては重要だし、それはわたし以外の大多数にとっては、どうでもいいことであろう（むしろどうでもいいことであってほしい）。だが、無数のものがたりのなかから何かが選ばれ、「大切なこと」にされるとき、そこには隠れた「誰にとって」が想定されている。そして、その誰かのために、少なくとも、そうという名目でものがたりは再構築されいる。

わたしは「ニュース」というものがあまり好きではない。そこに想定されている「国民の関心」、そこに想定されている「国民の視点」、そこに隠されて

いる「国民のものがたり」が、どうも鼻につく。それは世の出来事に無関心であれということではない。ただ、そこに「世の出来事」が、世界が、構築されていくことに、そのことに多くの人が無関心であることに、とてつもない嫌悪と恐怖を覚える。

わたしは今日りんごを食べた。あるりんごが今日わたしによって食べられた。そのときわたしはパーカーを着ていて、そのときりんごから汁が飛んだ。その（どの？）結果、パーカーが汚れた。それはわたしにとって大切なことだった、りんごなんて滅多に買わないし、その服はお気に入りのものだったから。その「わたしにとって大切なこと」の連続として、わたしは存在しているし、それを語ることで、わたしはあなたのなかに存在する。

中立の存在しないことは、それを目指すなということではかならずしもない。だけれども、より大切なのは、そこにある主観を大切にしていくこと。そして、その幸を、その毒を、忘れないこと。

小学生でも解ること

またノーマスク集会をしてるのを見て、「生物の授業から、やり直すことをお勧めします。本気で、小学生でも解ることが解らなくなってる。」と言われたことを思い出した。

だが、小学校で教わったことのうち、どのくらいが、今でも十分正しく、補足や注釈、条件、あるいは例外規則の設定等なく、問題なく受け入れて運用して良い知識なんだろうか。英語や「国語（マジこの言葉嫌い）」も、たとえばChomsky（言語学者）勉強してる人連れてきたら、ほぼ根底から書き変わる。漢字ですら異字体の説明されたおぼえないし、算数はほぼ全部公理系（ごめんね、詳しくない）によるよね？　遺伝ってメンデルくらいなら小学校だっけ？　多分高校教科書レベルでも、少なくともわたしが使ってた頃のは、結構今のわたしの知識で補足しなきゃいけないと思う。ちょこっと公民や経済みた

いなことやった気もするけど、あれは中学かな？　特に前者について、今はめちゃくちゃ文句言いたくなるだろうな、わたし。

「小学校の知識が無駄」とかそういう話ではない。勿論有益な事もある。ただ、たとえ研究が進んだとか、そもそもクソみたいな記述のされ方や「標準化」がされていたとかでなくても、当然のように（そしてそれは必要だけど）たくさん省いてたくさん誤魔化して説明してることはある。なにが「英語と日本語の違いは単に外在化のプロセスによってうまれた差異にすぎません！（Chomsky.（2019.）UCLA Lectures など）」で、なにが「コロナは視聴率を伸ばすための陰謀です」なのかを判断するのは、とても難しい。

冒頭の発言は、「性別」の話題で出てきた発言なのだが、小学校の教科書には、もしかしたら allo シスヘテロの「女」と「男」しか想定されていない記述があったかもしれない。だが、それが「正しい」か「誤っている」かは、真剣に考え続けなければいけないし、簡単に答えが出せるものでもないだろう。それは『トートラ』（解剖学の専門書）に同じような記述があったとしても。

Chomsky の『アナキズム論（*On Anarchism*）』に、好きな箇所がある。体制に迎合する主張をするのは、簡単だ。CM と CM の合間に、十分伝えられる。多少雑でも、すでに受け入れられている知識と整合がつく以上、肯定的に補足される。一方、体制に歯向かう主張はエビデンスを求められる。緻密な

論証を求められる。それを提示するのには時間と労力が不可欠になってしまう。

セックスが常にジェンダーであること（Butler『ジェンダー・トラブル』など）は、数ページのWikipediaだけでは説得しきれない。だからあんな難しい本があるわけで。一方、「セックス／ジェンダー二元論」は、小学校の教科書に載せられ、メディアで繰り返される。「簡単」だから。だから、往々にして、繰り返されるのは「わかりやすい」記述、納得しやすい記述のみ。それを否定するためには膨大な論証が多くの場合必要。それは通勤中の電車の中では読めない。だから、「簡単」で「わかりやすい」説明は延々と繰り返されていく。そして、実践されていく。

では、なぜそれは「簡単」で「わかりやすい」のか。それはわたしたちの知っている他のことと整合がつけやすいから、それを反証しなくてもいいから。では、なぜわたしたちはそれを知っているのか。それが、支配的なイデオロギーだから。「わかりやすさ」とは、権力それ自体であり、「わかりやすい説明」は、それの再生産行為にすぎない。

ではなぜわたしはマスクをしているのだろうか。

「非常識」と「新しい知識」を区別するのは難しい。わたしがコロナ陰謀論の「論文」を送られても読まないように、ChomskyやButlerを送られても

読まない／読めない人がいるのはわかる。そもそも、これに反する記述が世界に溢れる以上、見つけられない人もいるのはわかる。だから、「ワクチンにマイクロチップ入ってるわけあるかよ www」と思うように、「ノンバイナリーの身体ってなんだよ www」と思い続けたまま、それを繰り返してしまう人がいるのもわからないわけではない。そして、その両者の違いを問いただされたとき、わたしがなんと答えれば良いのか、わからなくなるときがある。勿論、マスクの有用性についてのデータも論文も示せる。それは、でも、わたしが受けてきた「常識」の波を再生産しているだけでないのか、不安になる時もある。「身体性別」がうんたらと言ってる人たちとやっていることがどれほど違うのか、わからなくなるときもある。

わたしにわかるのは、わたしなりに勉強して正しいと思えることと、どうであってほしいかだけしかない。その区別がつかないときもあるし、お互いに形成しあってるとも思う。それも良いことなのかわからないけども。わたしができるのは、自らを疑い続けながらも、自分の思う正しい行為を繰り返すことだけなんだろうけど、それも駅前のノーマスク集会と同じに見えちゃってるのだろうか。

それでも、マスクはしようね。ノンバイナリーの身体はノンバイナリーの身体だよ。少なくともわたしはそう考えている。

あかね空

夕暮れのひかりの中で私はためらう。

つれづれなるままにカムアウト

アナキズム

わたしはずいぶん前から「アナキスト」と自らを呼んでいたが、はじめは「右派のアナキスト」だった。高校の頃にVoluntaryismを知り、それ以降ずっと、「無政府資本主義者（アナキャピ）」と自分の思想を表現していた。「左派アナキズム」というのがあるのも知ってはいたが、「古いアナキズム」でしかないと思っていた。とにかく「右派リバタリアン」のグループに積極的に参加し、ロスバードの著作やアイン・ランドをよく読んでいた。たまにでてくる彼人らのレイシズムやセクシズム、エイブリズム、ホモフォビアやトランスフォビアなどには辟易していたし、特にアメリカの右派「リバタリアン」コミュニティでその傾向が強くなっていったことや、ホッペ主義者の増加にはい

らだちも覚えていたが、それでも、わたしは自分を「アナキャピ」であると思っていた。

アナキャピに代表される「右派アナキズム」はアナキズムではないと言う人は多い。わたしも今はこれに賛同する。本当のところ、当時のわたしも積極的な互助主義を前提とはしていたので厳密な意味での「アナキャピ」ではなかったのかもしれない。だけれども、少なくとも、資本主義を批判するという発想自体当時のわたしにはなかったという意味で、わたしはアナキストではなかった。

なにかが変わったのは、色々と心身の問題があって、自分の人生が思い通りに進まないだろうことに気づいた時だったと思う。その時、初めて、夢見ていたNYのマンションで生活し、好きな人とお風呂でシャンパンを開け、グアムの別荘で夏を過ごすような未来が、きっと永遠に手に入らないことに気づいた。そして、わたしは本当にそれを手に入れたかったのか、そもそもそれが「望ましい」と思っていたのはなぜか、そして、なぜそれを手に入れられる人と手に入れられない人がいるのか、真剣に考えるようになった。

この変化は、自分の当然と考えていた価値観を見直し、ずっと正しいと信じていた人や思想から距離を取るようになるきっかけとなった。これは、自分を表すためにつかってきたラベルを見直し、「敵」と信じていたコミュニティへ接近することであった。同時に、この変化は、ある種の連続性のあるものであ

った。自分がanarchistであると気づくには、資本主義もまた、国家制度と同じく暴力を正当化し、不平等を維持する権力装置という気づきが必要な「だけ」であったのだから。

いまのわたしの思想は、おそらく無政府共産主義者の影響を強く受けてはいるが、ただ小文字のanarchismであると認識している。それ以上のラベルを今は求めてはいないし、拒絶してもいる。

フェミニズム

わたしは（勿論クィア・インクルーシブな）フェミニズムに賛同している。そうでないアナキストは、自己矛盾してるとおもっている。そして、anarchistとして、“Anarchism”の「古典」とされてきた人たちのセクシズムやクィアフォビアに無批判であってはいけない。

SOGIE（SC）に関わる暴力も、国籍や人種に関わる暴力も、資本主義や国家体制に関わる暴力も、どれもわたしは無関係だとは一切思っていない。どの差別も、それが構造的なものであるなら、すべて絡み合い、維持し合い、相互作用し合うものであると考えている。それらは決して「独立した複数の軸」などで表されるものではない。そしてそれゆえに、ある人間が、ある状況下で経験する特権や抑圧、周縁化や中心化は、殆どの場合、一つまたは数個の名前のつけられる「〇〇差別」では説明しきれないと考えているこれは、同じ属性を

持つ人たちの連帯を否定するものではない。むしろ、それの必要を強く主張する。そういった連帯のひとつに「フェミニズム」があるとわたしは考えている。

実際の所、本読んでるとアナキストと自身を一切形容していないフェミニストの方でもアナキズムの匂いを感じることもある。一方で、「アナキスト」や「アナーカ・フェミニスト」を名乗りつつ、トランスヘイトを繰り返したりシスジェンダー規範を再生産し続ける方は、無視できぬほどいる。そういった思想は、わたしの考える anarchism に矛盾する。

今思えば、数年前のわたしはトランスフォビックなことをすごく言っていたと思う。ラディフェミとされる論者ばかり読んでいた時期があった。当時もあからさまな「トランスフォーブ」とではなかったが、「フェミニズムは女性のための運動ではなくて膣のある人のための運動」などと恥ずかしげもなく考えていたことはあった。

きっかけは、anarchist としての自分の思想を見直したこともあった。だが、それ以上に、ちょうどその頃、トランスの方とオフラインで仲良くなったのは非常に大きかった。オフラインでも少しジェンダーに関わることをすることが増えたりもした。そんなこともあり、当時の twitter アカウントで feminism や Queer のことを積極的につぶやくようになった。やがて、それ

専用のアカウントをTwitterとDiscordでつくった。紆余曲折あって数回生まれ変わった後、“neko”がうまれました。

わたしの今の発言が、当然差別性からフリーだとは思っていない。だが、alloシスヘテのアライの方含め、nekoとなってから仲良くなれた様々なフェミニスト、アナキスト、そしてアクティビストの方のことばを聞いたり、ともに話したり、それらを通じて考えたりして、わたしはいろいろなことを学べた。こうやって色々学び続け、数年後に今を振り返ったとき、「やっぱり、差別的なこといっぱい言ってたな」と気づけるようになってたいと思う。

そのためには、周縁化されている人たちの声をしっかりと聞いていかなければならない。“Anarchism”や“Feminism”の歴史に忘れられた、あるいは最初から記憶すらされなかった、しかし確実に社会を変え続けた多くのアナキストやフェミニストがいたことを、忘れてはいけない。周縁化されているということは、声が聞かれないということ。声が聞かれないということは、周縁化されているということ。だから、Twitter上でもオフラインでも、無視されてきた人たちの声をできるだけ拾って生きていきたい。フォロワーの少ない方たちと積極的にお話したり、拡声器になったりしたい。そもそも、anarchismもfeminismも、本来はそういう運動ではなかったか。そういう思いから、少し前にフォロワー数の少ない相互フォローの方を集めたリストもつくってみま

した。フォロワーが多い人のツイートは、積極的に拡散しなくても、みな反応してくれる。だから、わたしのツイートのいいねやRTより、声を無視されている人たちの声を拾い、その拡声器になってほしいです。

性別

そうやって、一つづつ、わたしは自分の思想や理想、アイデンティティを問い直されていった。考えていくうちに、ほかのひとのそれらについて少しでも理解しようとしていくうちに、ピースがそろっていくように、代わりのことばを提案されていった。それまで感じていた様々なことを説明するための表現が、少しづつわかるように、あるいはわからなくても大丈夫なことが、わかってきた。

わたしは、わたしの性別がわからない。

わたしは、ずっと自分のことを「女性」だと思っていた。同時に、ずいぶんと前から、何かが違うと違和感も持っていた。それは、たとえば病院の問診票で、性別欄にマルするのを忘れたふりをすることとして。「女子会」に呼ばれることが嫌で、断ってしまうこととして。「レディースセット」や「女性に人気」を頼まないこととして。「Ms. neko」と呼ばれるのは、ずいぶんと前からたまらなく嫌だった。nekoに関してはアカウントをつくった初期からany

pronounsでやっていたが、これはオフラインでshe/herと呼ばれることが多いことを、なんとか「わたしはany pronounsだから」と納得させるための方便であると、どこかの段階で気づいていた。

誰かのいるトイレを避けるために、公衆トイレ自体避ける。必要な場合は、誰もいないところを探す。他の女性の前で裸を見せるのがすごく嫌。ほぼいつも、可能な限り「メンズ」の服とデニムを着ている。定期的に「男性」だと思われる。最近も「おにいさん」と言われた。「おねえさん」と訂正され、嫌な気分になった。身体違和は多分ないが、醜形恐怖症みたいなものは少しある。自分の声も本当に大嫌い（だから一切声出ししてない）。だから、容姿や服装などからジェンダリングされないnekoとしての「わたし」が、オフラインでの自分以上に「自分らしく」いられて、楽であった。まあ、でもたまに自分のこと「やっぱ、わたし可愛いのかな」ってちょっと思います、そういう日はみんなあると思いますが。

自分を男性だとは全く思わない。自分をトランスジェンダーであると表現するのも適切であると思わない。オフラインではごく一部の知り合い以外には「シス女性」と言っている。だが、ほんとうのところ「シス女性」であると今は思っていない。オンラインでも、「女性として」などとはこれまでも様々な場所で書いてきたが、いつもすこし首かしげながら書いている。まあ、女性の一種かもとも感じたりするときもありますが。

これらのことは、自分が「レズビアン」だからだと思ってた。だけれども、やっぱりそれだけではないと段々気づいていった。

自分の性別をわたし自身が理解している限りに言葉で表すなら、女性寄りのノンバイナリーかノンバイナリー寄りの女性とAの間のどこかで、しかもジェンダーフルイドな気がしている。だが、もしかしたらジェンダー・ノン近フォーミングなだけかもしれない。でも、しっくりくるのかというと、わからない。「名乗ってもいいの？」みたいな面も正直ある。今は「クエスチョニング」や「ノンバイナリー」と書いてみたり、挙句には「性別わかんないという性別」とか言ってみたり。どうにかして自分の性別に名前をつけたい、説明する言葉が欲しい、と思ってる一方で、「名前をつけられないということも、大切なことなんじゃない？」と思ったりもして、「性別がわからないという性別」だとか、大文字のQueerで納得してる部分もある。でもやっぱり悩んだりする。たまに、夜中に泣いたりするけど、次の日には「やっぱどうでもよくね」と思ったりもする。

指向

＊以下、わたし自身の性的・恋愛的慕情の在り方の話をするため、「女性（？）のみが好き／性的に惹かれる女性（？）」の意味で、「ビアン」という語を使います。でも、バイセクシュアル含め、M-specのビアンもいます。A

ジェンダーやノンバイナリーのビアンもいます。また、わたしは以下で「好き」という語を「性的関心を覚える」と区別することなく、使います。でも、Aro や Ace のビアンもいます。当然のことながらビアン・コミュニティの一部です。

自分の性別に悩むこと、すなわち、自分が「女性」であるかわからなくなっていくことは、自分を「レズビアン」と表現できなくなることへもつながった。neko でも、それ以外の場所でも、ずっと自分のことを「ビアン」と、あるいは「レズ」と表現していたが、この違和感が募りやめた。

「女性」。そもそも、わたしが好きなのは、「女性」なのだろうか。ノンバイナリーの方にも惹かれることがあるので、「女性（寄り）」と拡張しても、それは変わらない。わたしがある人に性的欲求を感じるのは、その人が「女性（寄り）」であるからなのだろうか、あるいは、それを感じないのは、その人が「女性（寄り）」ではないからなのだろうか。ここで言う「女性」とは、そもそもなんなのだろうか。Adult human female？　Female とは、具体的にどういった特徴のある人のことだろうか「性器」？――いや、それは違う。性的欲求も恋愛欲求も、わたしはその人の性器を確認する前から明確に感じるし、性器を確認する前後で変化する感情でもない。たとえ「例外」であっても、ペニスのある女性も XY の女性も卵子をつくらない女性も妊娠しない女性もいる以上、少なくともこれらは個体レベルに応用できる十分な「基準」では

ない。「膣があるなら女です」――ならば、もし何らかの理由で膣を失えば、あるいはなくして生まれていたとしたら、わたしは「女」ではなくなるの？「妊娠できるなら女です」――妊娠の経験がない人は、ましてや自分のパートナーについて、どうやったら自分の性別を判断しているのだろう？　「XXだったら女です」？――そもそも自分自身の性染色体すら、わたしは知らない。「遺伝子」？――遺伝子検査を受けたのだろうか？。「骨格」？――笑わせないで。

くだらない思考実験だけれども、もしわたしたちが本当は身体など持っていなくて、実はすべての「人」は同じ真っ白な一つのキューブのなかに分散された存在でしかないときとわかったとき、わたしの「性別」は今となにか変わるのだろうか。あるいは、なぜ「neko」などというへんな名前のへんなアイコンの Twitter 上の存在にも性別があると想定され、「neko とかいう女」と言及されるのだろうか、「neko」の性別は、つねに画面のこちら側にいる「わたし」と同じ性別なのだろうか。

大体において、アニメのキャラクターは染色体ももたないし、描かれない限り性器も持たないのに、わたしはなぜあるキャラには惹かれて、あるキャラには全く惹かれないのだろうか。

そもそも、身体にあるのは様々な特徴でしかない。それらより「普通なら持ってる」はずの臓器や特徴の類型をつくりだしているのは、知識や言説でしか

ないのではないか。いずれにせよ、「ジェンダーアイデンティティ」を笑えるほど、「身体」は正確な基準たり得ない。もし言語化できる「基準」があるとしても、それは少なくとも別の所にある。

あるいはこう言う人もいるかもしれない、「ビアンか否かはセックスの仕方で決まる」——なんだそれ。シリコン製だろうと肉製だろうとのペニスを挿入し合うビアンだっているし、全く挿入のないビアンもいる。たまにふざけて挿入するビアンもいる。いわゆるタチネコがきれいに分かれているビアンもいれば、ぐちゃぐちゃなビアンもいる。BDSMを好むビアンも、嫌うビアンもいる。そもそも性行為のないビアンカップルもある。もちろん、ペニスを挿入しないシスヘテカップルもいるし、男性側が挿入され、女性側が挿入するシスヘテカップルもいる。

だいたい、わたしが惹かれる対象を「女性」と表すのは、正確なのだろうか。わたしはなぜ「女性」の一部しか好きにはならないのだろうか。また、なぜ一部のノンバイナリーの方にも惹かれるのだろうか？このとき、自分を「同性愛者」と表現することは不正確なばかりか、ミスジェンダリングの側面もあるではないか。

最近、こう考えている。結局、わたしが好きなのは「女性」ではなくて、あくまでいくつかの特徴や表現、しぐさなどでしかないのではないか。そして、それらの多くまたは殆どが、伝統的に「女性」と結び付けられてきただけでし

かないのではないか。この感覚は、どんどんとはっきりとしてきている。すべての人の恋愛・性的指向をこう説明できるかはわからないけれど、少なくとも私に関しては、「同性愛者」でも「女性（寄りの人）が好き」でもなくて、こう表現するのがもっとも適切に思う。こう説明するのならば、結局の所、「性的指向」は、単に「どんな特徴へのフェティシズムを持っているか、そして、それらは伝統的にどの性別と結びつけられてきたか」でしかない。このとき、allo シスヘテ規範は、結局の所、「生殖と家族制度に対するフェティシズム」として再考される。戸籍上の同性間の婚姻や戸籍上の性別変更に関わる各条件、そもそも戸籍という制度自体、あるいは性別二元論や本質主義的な性別の理解、ホモフォビア、トランスフォビア、クィアフォビアやセックスワーカー差別も、「モテ」や「童貞」いじりも、その大部分はこの「フェティシズム」を押しつけ、再生産する装置の一部である。エイブリズムやゼノフォビアすらもわたしは関係があるように思う。ならば、Queer の運動がジェンダー・アイデンティティと性的／恋愛的指向との間に分断できるという主張も、フェミニズムが Queer 運動とは無関係であるという主張も、「私は自分のパイを求めるだけ」も、一層無意味で逆効果に思えてくる。

わたしの理解する「性別」

「ある社会において、ある主体Ｓがジェンダーアイデンティティや、それに基づく表現、あるいはalloシスヘテ規範や生殖至上主義に基づくものも含めた社会的規範、それらと弁証法的につくり合うジェンダーという概念、そしてその一部、ないしは強くそれに影響されているセックスという概念、これらの総体であるセクシュアリティについて、そこから見いだされ、様々な人の行為や表現、特徴を解釈する際に用いる基準の一つとその社会で想定されていると想定されている類型の総体、また、ある一つまたは複数の類型への類縁性として、意識的ないしは無意識的な自覚を通じて理解され実践される、Ｓの自己同一性に関する認識の一部に与えられる名。これは、さまざまな言説や知識として社会の中に共有されて存在し、わたしたちは様々な行為の繰り返しを通じて、これを維持、再生産ないしは更新し続けている。」

でも、これだって、わたしが今の自分自身のそれを理解するために考えた「性別」の＜説明＞でしかないし、わたし以外の人にとっては、どうでもいいものでしかない。それよりも大事なのは、相手のアイデンティティを、たとえ自分には理解しきれなかったとしても、また、その根拠がなんであったとしても、大切にすることでしかない。

結局言いたかったこと

自分の性別や性的指向について、きちんと「カムアウト」したかったので、した。これまでずっと「非当事者」とか「マジョリティ」とか安易に言われていたの、結構気にしてました。特に「当事者」なのかずっと悩んでいる身として。わたしの今の性別は「よくわかんない」です。わたしの性的指向も「よくわかんない」です。でも、SOGIE にどうしても名前をつけるなら、Queer です。人称代名詞は前からと同じく、なんでもいいです。あなたが押しつけてください。呼びかけも、同じく。どれも間違えてると思いません。ただ、they/彼人、「neko ちゃん」呼びが「うれしい」です。これも、前から変わりません。

でも、それ以上に言いたかったことは、「性別」というものの、わけわかんなさ。その定義できなさ。そして、その「過程」が個人的であること。それの理解や認識の詳細は、その人のさまざまな経験や思想、価値観と結びついた、独特なものであること。ゆえに、多様性があること、それを認めてほしいこと。安易に「定義」などしないでほしいこと。そして、その人の「性別」を含むすべてのアイデンティティを大切にしてほしいこと。過度な一般化もせず、「素朴な疑問」なんかでぶん殴らないように、尊重してほしいこと。性別なんてわけんわかんないこと。でも、でも、それでもいいかもしれないこと。それを前提とした、会話をしてほしいこと。

もちろん、誰でも間違えてしまうことはある。だから、踏みにじってしまったときは、すぐに、理由など問わず、自分の「定義」を押しつけず、まずは謝って。

正直、どちらかと言うと、最近アライの人の表現に傷ついたり、嫌な思いしたりすること多い、それはわたし自身も自分のジェンダーやセクシャリティを考えることが増えたせいもあるのだと思うけれど。わたしは自分の「性別」を表すためには、既存の語を使う必要は必ずしもないとも思っている。よくネタにされる「木自認」や「鹿自認」、あるいは「わたしは戦闘ヘリ自認です」みたいなのだって、正直なことを言えば、わたしは「自分の性別を表すのに最も適切な表現は【木】だ」という人がいることに、なんのおかしさも感じない。そういうのを笑ったり、なんでも「ヘイターの創作」にしたり、「木は性別じゃありませーん」は、いくら「カウンター目的」でも少し違うと思う。問題は、今話題にされているのがアイデンティティである、という点が共有できていない、ただそれだけだと思う。

We are Here, We are Queer

わたしたちはクィアである。わたしたちはここにいる。それでいい。

a.n.: a ZINE by anarchist_neko

2023 年 2 月 10 日刊行

著者: anarchist_neko

Twitter: anarchist_neko

Ko-Fi: ko-fi.com/anarchist_neko

本 ZINE は著作権を放棄しています。転載、翻訳、再配布等を認めます。

2023 anarchist_neko. No rights reserved.

This ZINE is free to read, share, translate and/or redistribute.